オスマン帝国のクリミア支配とロシアの進出によるその変容
―黒海地域史の観点から―

研究代表者　黛秋津（東京大学大学院総合文化研究科准教授）

１．はじめに

本研究は、15 世紀から 18 世紀まで、オスマン帝国のいわゆる付庸国として帝国秩序に連なっていたクリム・ハーン国に注目し、オスマン中央政府と同国との間の法的・社会的諸関係が、18 世紀後半から始まるロシアの本格的な南下政策によっていかに変容し、最終的なロシアによる併合に至ったのか、という問題を明らかにすることを目的としている。

このような研究課題を設定し、本助成を得て研究を進めた背景として、二点挙げることができる。一つは、代表者の研究課題である近世近代移行期の黒海地域史研究の文脈において、この課題は避けて通れない問題であったこと、もう一つは、本研究開始時に大きな問題となったクリミア問題を歴史的観点から考察し社会に発信する必要が生じていたためである。

前者に関しては、これまでの研究において、オスマン帝国の付庸国であったワラキアとモルドヴァの二つの公国に注目し、①18 世紀後半のロシア、そしてそれに続く西欧諸国の両公国進出、②両公国を含むバルカンの「東方問題」化、さらに③バルカン問題を通じてオスマン帝国とロシア帝国が西欧諸国と政治外交的および経済的諸関係を緊密化させ、結果として統合へと向かう過程の一端を、ロシア側・オスマン側・西欧側のそれぞれの一次史料に基づいて明らかにした。しかし、その研究の過程で浮かびあがった大きな課題が二つあった。第一に、ワラキア・モルドヴァ両公国へのロシアの進出は、従来の伝統的なオスマン帝国内の「宗主＝付庸」関係を解きほぐすような様々な政策により成し遂げられたことから、この問題をより正確に理解するためには、ロシア進出以前の宗主＝付庸関係を十分把握する必要があること、第二に、ロシアのバルカン進出は、黒海への進出という大きなヴィジョンの下、対クリミア政策やカフカース政策、および黒海通商政策などと密接な関連を持って行われていたことが明らかとなったため、これらを包括的に理解する必要があること、であった。こうした新たな課題から、黒海周辺地域に存在する、クリミアのクリム・ハーン国、カフカースのミグレリ、グリアなどのオスマン帝国内の付庸国とオスマン中央政府との関係を、法的側面と実態面の両面から明らかにし、さらにワラキア・モルドヴァのケースと同様、ロシアがこの関係をいかに切り離して南方への勢力進出を遂げたのかを実証して、より広い視野から将来改めてバルカンの問題を検討する必要があると考えた。このような理由により、研究対象地域を黒海周辺地域へと広げ、かつ、ロシアの進出

により変容を余儀なくされた、18 世紀のオスマン帝国内における宗主＝付庸関係に特に注目して、黒海地域の中でも最初にロシアによって併合されたクリミアに焦点を当てることとした。

一方、後者に関しては、本研究課題申請時の 2014 年 3 月、ロシアがクリミアを事実上編入し、これによって国際政治は大きく動いた。このいわゆる「クリミア危機」については様々な識者が見解を述べ、その中には歴史的背景の重要性を指摘するものもあったが、当時歴史的背景として語られたのは、クリミア戦争と第二次大戦時のロシアのクリミアでの被害、そしてフルシチョフによるクリミアのウクライナ編入についてのみであり、近代以降の黒海をめぐる大国間の争いの文脈でとらえる重要性を指摘する声は聞かれなかった。そして何よりも、歴史研究者から社会に対して、この問題に関する発信はほとんどなかったのである。このようなアクチュアルな問題も、「クリミア危機」の出発点ともいえる 18 世紀後半のロシアのクリミア併合に注目する一つの大きな動機であった。

以上のような背景を踏まえて行った本研究は、一方では 18 世紀のオスマン帝国とクリム・ハーン国との間の宗主＝付庸関係の実態と変遷をオスマン側史料に基づいて分析し、他方ではロシアのクリミア進出の動きを、19 世紀に刊行された史料集をはじめとするロシア側史料から明らかにしようとした。これらの双方向からの研究に加え、18 世紀のクリム・ハーン国史研究の成果をも参照し、三方向からの研究を突き合わせることにより、18 世紀後半のロシアによるクリム・ハーン国併合という事象を、黒海地域全体をめぐるロシア・西欧諸国・オスマン帝国間の動きにも目を配りながら包括的に理解することを目指した。以下、その成果の概要を記す。

２．研究成果の内容

①問題の所在

2014 年のロシアによる「クリミア編入」は国際政治に大きな影響を与えたが、その歴史的出発点は 1783 年のロシア帝国によるクリム・ハーン国併合に求められる。この併合により、ロシアは黒海沿岸に初めて大規模な領土を獲得し、その直前にオスマン帝国から得た他の様々な権利と合わせ、長年の念願だった黒海への進出を確固たるものとした。それ故 1783 年のロシアのクリミア併合は、ロシアの黒海進出、そして黒海をめぐるロシアとオスマン帝国との関係の中で考察されるべき事象である。

ロシアの黒海進出とは、黒海における船舶航行や通商の権利とともに、黒海周辺地域への影響力拡大の動きを意味するが、そのような動きが本格化したのは 1774 年のキュチュク・カイナルジャ条約以降のことであり、それ以前の時期においては、黒海はオスマン帝国によって閉ざされた、いわば「オスマン帝国の湖」であった。それは、オスマン帝国以外の国の船舶が黒海へ原則として入れなかっただけなく、実際にオス

マン帝国は、その周辺地域のほとんどを支配していた。しかしその支配のあり方を見てみると、特徴的なのは、黒海周辺にはオスマン帝国の直接支配地のほか、多くの付庸国が存在していた点にある。具体的には、ワラキア、モルドヴァ、クリム・ハーン国、アブハジア、ミグレリア、イメレチア、グリアなどの王国や公国がオスマン帝国の付庸国として、自らの政治組織を維持したまま帝国秩序に連なっていた。その中でもクリム・ハーン国は、チンギス・ハーンにつながる伝統を持つ国家としてオスマン帝国にとっては非常に重要であり、17 世紀初頭には、オスマン帝国皇帝一家の男子が途絶えた時は、クリム・ハーン国のギライ家がその皇帝位を継ぐという言説が見られるほどであった。

18 世紀に始まるロシアの黒海進出は、オスマン帝国による黒海周辺の付庸国支配に動揺を与え、クリム・ハーン国支配もその例外ではなかった。それ故、ロシアのクリミア進出とオスマン帝国とクリム・ハーン国間の宗主＝付庸関係の変容は表裏の関係にある。しかしながら、ロシアのクリミア進出、あるいはクリミアをめぐるロシア＝オスマン関係を、オスマン帝国の付庸国に対する宗主＝付庸関係の変容という観点で捉えた研究は少ない。

ここで先行研究について言及するならば、クリム・ハーン国に関しては史料の欠如のためこれまで盛んに研究されてきたとは言い難い。本格的な研究は 19 世紀後半のロシアで始まり、V. D. Smirnov による詳細な事例研究[1]や N. Dubrovin によるロシアのクリミア併合に関する資料集が現れた[2]。20 世紀に入るとトルコでも Halil İnalcık らがオスマン史料を用いた研究を行い[3]、さらに欧米でも 20 世紀後半に Alan Fisher によるロシア語とオスマン語史料を用いた研究が現れ[4]、近年ではポーランドの Dariusz Kołodziejczyk がポーランドとクリム・ハーン国関係研究を進めている[5]。しかし、繰り返しになるが、本研究が扱うようなクリム・ハーン国に関する宗主＝付庸関係に注目した研究はこれまでほとんどなされていなかった。最近ようやく、オスマン帝国のヨーロッパ部における付庸国に注目した研究が現れ[6]、その論集の中で同国の

---

[1] В.Д. Смирнов, *Крымское ханство подъ верховенствомъ Отоманской Порты до начала XVIII вѣка*, СПб. 1898; *Крымское ханство под верховенством Оттоманской Порты в XVIII в. до присоединения его к России*, Одесса, 1898.

[2] Н. Ф. Дубровин, *Присоединение Крыма к России：Рескрипты, письма, реляции и донесения*, 4 т., СПб., 1885-1889.

[3] Halil İnalcık, "Yeni Vesikalara Göre Kırım Hanlığı'nın Osmanlı Tabiiliğine Girmesi ve Ahidnâme Meselesi", *Belleten*, VIII, (Ankara 1944), s. 185-229.

[4] Alan Fisher, *The Russian Annexation of the Crimea 1772–1783* , Cambridge: CUP, 1970.

[5] Dariusz Kołodziejczyk, *The Crimean Khanate and Poland-Lithuania: International Diplomacy on the European Periphery (15th-18th Century). A Study of Peace Treaties Followed by Annotated Documents*, Brill, 2011.

[6] Gábor Kármán and Lovra Kunčević eds., *The European Tributary States of the Ottoman Empire in the Sixteenth and Seventeenth Centuries*, Brill, 2013.

宗主＝付庸関係に関する問題が考察されているものの、その主たる検討対象は主に 17 世紀であり、本研究が対象とする時期ではない。

以下、18 世紀後半のロシアのクリミア進出と 1783 年の併合という事象を、ロシアの影響によるオスマン＝クリム間の宗主＝付庸関係の変容という観点からとらえ考察する。その際、比較の観点から、黒海周辺に位置するワラキアとモルドヴァの例も取り上げて論ずる。

②ロシア進出以前のオスマン＝クリム・ハーン国関係

オスマン帝国は他の帝国と同様に支配領域を多様な形で支配し、その中にはいわゆる付庸国をも含んでいたが、1475 年頃にオスマン帝国の支配を受け入れたクリム・ハーン国も、その後帝国の直轄領となることなく、18 世紀後半までオスマン帝国に付庸国として従属した。そのオスマン帝国の付庸国全般に関してしばしばなされる議論は、その宗主＝付庸関係は条約によって規定されていたのか否かということである。クリム・ハーン国に関しても 18 世紀末以来そのような条約の存在が信じられてきたが[7]、1944 年に İnalcık がそれを否定する論考を発表し[8]、その後はそうした条約は存在しなかったとする考え方が一般的になっている。ちなみに、ワラキアとモルドヴァに関しても同様の議論が起きているが、ここでも条約の存在を否定する意見が現在では優勢である。オスマン帝国とクリム・ハーン国との関係は、条約ではなく、その後の様々な慣例の積み重ねの中で次第に定められ定着したと考えるべきであろう。

では、18 世紀以前のオスマン中央政府による付庸国クリム・ハーン国支配はいかなるものであったのだろうか。これに関しては、種々の税の支払いや戦時における軍の参加の義務、独自の外交の禁止など様々であるが、そうした実態と並んで重要な意味を持ったのは、儀礼的象徴的に付庸国支配を示す行為である。例えば、それを象徴する一つの事例としてフトバ（khuṭbah, トルコ語では hutbe）が挙げられる。フトバとは、毎週金曜日や祭日にイマームが行う説教のことであり、イスラーム世界ではその中でその地を支配する世俗権力者の名が呼ばれる。クリム・ハーン国では、その時にオスマン皇帝の名が挙げられたとする史料が数多くみられ、この領域の支配者がオスマン皇帝であることが毎週のように住民たちに示されていたことになる。その一方で、若手のクリム・ハーン国史研究者 Natalia Królikowska は最近の研究の中で、税の徴収や戦利品などいくつかの具体的事例の検討を通じて、オスマン皇帝がクリム・ハーン国の問題にどれ程関与したかを考察し、その中でハーンの権威や権力はオスマン皇帝によって必ずしも大幅に制限されていたわけではなかったことを明らかにしている[9]。

---

[7] Claude Charles de Peyssonnel, *Traité sur le commerce de la Mer Noire*, Tome 2, Paris, 1787, pp. 228-230.
[8] İnalcık, *op. cit.*.
[9] Natalia Królikowska, “Sovereignty and Subordination in Crimean-Ottoman Relations (Sixteenth-Eighteenth Centuries)”, in Gábor Kármán and Lovra Kunčević eds., *op. cit.*, pp. 47-58.

しかしながら、支配者たるハーンの選出と即位に関しては、オスマン皇帝がかなりの程度の権限を有していたこともまた明らかになっている。ハーン位には、チンギス・ハーンの血を引くギライ家の一族の長子が選出されるのが慣例であったが、オスマン皇帝の介入によりこの慣例に反して長子ではない者がハーンとして即位した事例も数多く存在した。なぜこのようなことが可能なのか。それは、新たに選出され即位したハーンはイスタンブルに使節を派遣し、オスマン皇帝の承認を得なくてはならなかったからである。皇帝は新たなハーンに、馬の尻尾(tuğ)のついた旗や太鼓(davul)などの権力の象徴を与え、これがオスマン皇帝の付庸国に対する権威を示していた。この象徴する品を得なければ、ハーンと認められないわけであり、クリム・ハーン国内での次期ハーン位をめぐる争いなどにオスマン帝国は介入し、自らに都合のよい人物をその位に就けることもできたのである。こうした付庸国の支配者の承認は、ワラキア・モルドヴァでも見られ、新たに選出された公を承認する権限を有する皇帝は、事実上公選出のプロセスに介入し、17 世紀には多くの場合事前に皇帝が同意する人物しか公の位に就けなくなった。この点で、両公国とクリム・ハーン国は類似している。

以上のように、ロシア進出前のオスマン帝国とクリム・ハーン国との関係は、ハーンがオスマン皇帝の影響を受けない一定の自立性を有する一方で、新しいハーンの選出と即位に当たっては、承認の権限を有するオスマン皇帝が強い影響力を及ぼしていた。

③1774 年キュチュク・カイナルジャ条約

このような関係が大きく変化するのが 18 世紀後半である。それ以前の時期においても、ロシアは 17 世紀末にアゾフ海への出入口に位置するアゾフを攻略してオスマン帝国から奪取し、また 1700 年のイスタンブル条約でクリム・ハーン国のロシアへの侵略を禁じ、さらに 1735 年には逆にロシア軍が大規模にクリム・ハーン国に侵入した。しかし、ロシアのこうした進出は、従来のオスマン＝クリム関係に大きな影響を与えるものではなかった。

しかしながら 18 世紀後半になると、その宗主＝付庸関係に大きな転機が訪れる。それが、1768 年に勃発したロシア・オスマン戦争と 1774 年のキュチュク・カイナルジャ条約であった。この戦争はオスマン帝国の黒海支配を大きく動揺させることになり、クリム・ハーン国の問題は和平交渉においてロシア＝オスマン間の重要な政治外交問題となった。

ポーランド問題を契機として 1768 年末に始まったロシア・オスマン戦争は、クリミア、両公国、そしてエーゲ海の各方面でいずれもロシア側が圧倒的に優位に立ち、1769 年にはロシアの軍事的勝利は明らかとなった。そうしたなか、黒海への進出を狙うロシアは、当時同盟関係にあったプロイセンとオーストリアと連携を取りつつ、来るべきオスマン帝国との和平への準備を進めた。当初クリム・ハーン国の併合を考え

ていたロシアであるが、プロイセン・ハプスブルク両国の同意が得られないことからクリム併合を断念し、そのオスマン帝国宗主下からの独立へと方針を変えた[10]。

その後行われた和平交渉の経過を詳細に見ると、クリム・ハーン国独立をめぐる問題が、両帝国間の最大の懸案であったことがわかる。ロシア・オスマン両国間の和平交渉は、1772 年 8 月、ワラキアとモルドヴァの国境の町フォクシャニで開始されたが、その第 3 回目の会談において、ロシア側首席全権代表のグレゴリ・オルロフ G. Orlov は、クリム・ハーン国の独立が和平の前提であることをオスマン側首席全権代表オスマン･エフェンディに伝えた。オスマンは交渉を中断して数日間対応を協議し、そしてその後のロシア側との会談で彼は、クリム・ハーン国の自立は認めるが、オスマン皇帝は宗教的な面に限ってクリム・ハーン国に権威を及ぼす、という提案を行った[11]。彼は、クリム・ハーン国の住民たちはイスラーム教徒であるため、ハーンが支配領域における信仰と公正を実現するためには、イスラームの法に従い「ムスリムたちの長」であるオスマン皇帝の承認を受けなくてはならないと主張し、すなわち、ハーンの選出について、従来通りオスマン皇帝が新しいハーンを承認することを要求した[12]。ロシア側は、オスマン側のこうした主張をこの時点では受け入れなかったが、オスマン側はこの主張に固執し、交渉は物別れに終わった。

同年 11 月にブカレストで再開された和平交渉でもこの議論は再び提起された。その頃、和平交渉の仲介役であったプロイセンのイスタンブル駐在大使 Zegelin からロシアの交渉役であった Obreskov への書簡の中で、オスマン側の主張として、「クリム・ハーンがメッカのカリフ位を狙い得る独立国の君主としてクリミアを支配することは認められない。メッカのカリフの権利を確実に確保するために、オスマン帝国は戦争を継続する」、と述べられている[13]。このように、このブカレストでの和平交渉の中で初めて「カリフ」の語が現れることになった。ロシア側も、オスマン帝国に対し、ロシア軍のクリミア駐留の見返りにこのような「儀礼的」な権利を認めることは必要だという認識を有し、オスマン側との妥協点を探った。その結果、1774 年 7 月に最終的に締結されたキュチュク・カイナルジャ条約では、その第 3 条において「オスマン皇帝はムスリムの長にして一神教徒の代理人（カリフ）である（imâm'ul-mü'minîn ve halîfet'ül-muvahhidîn)」という有名な一節が盛り込まれた。これは、19 世紀後半にオスマン皇帝を中心にイスラーム教徒の団結を呼びかけるパン・イスラーム主義の出発点とされ、この和平交渉の中でクリム・ハーン国の独立を目指すロシア側と、それを阻止して可能な限り自らの影響力を温存したいオスマン側の妥協の産物であるこ

---

[10] *Архив государственного совета*, т. 1, ч. 1, СПб, 1869, с. 43.
[11] Е. И. Дружинина, *Кючук-кайнарджийский мир 1774 года (его подготовка и заключение)*, Москва, 1955, с. 176-7.
[12] *Там же*, с. 178-179.
[13] В. Уляницкий, *Дарданелли, Босфор и Черное Море в XVIII веке*, Москва, 1883, приложения с. CLI.

とは知られているものの、一般には、独立に抵抗するオスマン側に対し、ロシア側が提示した妥協案として理解されているようである。しかし実際にはその反対であり、オスマン側からの提案であることが明らかとなった。

この条約により、クリム・ハーン国は条件付きながら独立を果たし、原則としてそれ以前のようなオスマン帝国の保護を受けることはなくなった。ロシアは「独立国」であるクリム・ハーン国に対して軍事的政治的影響を拡大しようとし、一方オスマン帝国は何とか残した宗教的権威の行使を可能な限り拡大解釈することにより、従来通りの影響力の維持を試みることになる。

④キュチュク・カイナルジャ条約後の宗主権をめぐる攻防

1774 年条約後、オスマン帝国とクリム・ハーン国の宗主＝付庸関係が緩む方向で変化したことは確かであるが、オスマン帝国は完全に宗主権を失ったということが出来るのだろうか？それを知るためには、条約後もオスマン帝国が「独立した」クリム・ハーン国に対して有していた権利について検討する必要がある。まず、上述のフトバについては、引き続きオスマン皇帝の名前が読み上げられたことが確認できる。このことは、その地にオスマン皇帝の権威が及んでいることを意味し、住民は毎週それを確認することになる。これについては条約前と大きな変化はない。次に、オスマン側が強く主張した、ハーンの承認と任命についても、オスマン皇帝は従来通りのやり方を変えようとはしなかったため、この問題がロシア側との対立を引き起こした。その例として、シャーヒン・ギライ（Şahin Giray）の事例を挙げることができる。彼は 1771 年にロシアに使節として派遣され皇帝エカチェリーナ 2 世の知遇を得て以来彼女のお気に入りの人物となり、ロシアの支持を受けた彼は 1777 年にハーンに選出された。条約後ロシア側は、機械的かつ儀礼的な新ハーンの承認と任命をオスマン側に要求していたが、彼は、即位にあたってオスマン皇帝の承認を得るため、慣例に従って使節をイスタンブルに派遣したものの、従来の使節と異なりオスマン皇帝の庇護を求めず、ハーン位の正当性のみ承認を求める姿勢を示し、また使節団の規模も、従来は数十人規模であったのに対し、この時は 4 名にロシア官吏 1 名を加えたわずか 5 名を派遣したに過ぎなかった。そのためオスマン側はシャーヒン・ギライのハーン位を承認せず、この使節団を逮捕しロードス島へ追放する決定を下した[14]。そしてイスタンブルにいたセリム・ギライ 3 世を皇帝自らハーンに任命し、密かにクリム・ハーン国に派遣したため、この出来事がロシアとオスマン帝国間の緊張を高めることになった。

こうしたハーンの承認をめぐる問題の他、シャーヒン・ギライは一連の改革の中で、オスマン皇帝の承認を不要にすること、後継者争いが生じないように世襲制にするこ

[14] Osman Köse, *1774 Küçük Kaynarca Andlaşması (Oluşumu-Tahlili-Tatbiki)*, Ankara, 2006, s. 246.

となどを決めたため[15]、これらの諸問題はロシア・オスマン間の大きな懸案となった。両国間では戦争の勃発が懸念されるほどに緊張が高まったが、結局交渉により 1779 年にアイナルカヴァク協約が締結され、1774 年の条約内容の確認とともに、当時クリム・ハーン国に進駐していたロシア軍の撤退と、オスマン帝国のシャーヒン・ギライのハーン位承認が定められた。その第 2 条で、ハーン位が空位になり新ハーンが選出された時には、オスマン皇帝から承認の勅許状が送られ、その際いかなる理由や口実も示されないこと、という内容が挿入されたため、このシャーヒン・ギライの事例のようにオスマン帝国が新ハーンの承認を拒否することは、この条約によりますます困難となった。また彼が正式にハーンとして承認され正当性を得たことで、ロシアのクリミアへの影響力は急速に増大する結果となった。

このように、オスマン帝国は、キュチュク・カイナルジャ条約で定められた「カリフ」としての宗教面に限定されたクリム・ハーン国への影響力の行使を最大限活用して、条約後も宗主たる立場を維持しようとしたのに対し、ロシアは自らのクリミアへの影響力拡大のため、その宗教面の権限を可能な限り限定することでそれに対抗した。そうした対立が表れた最も大きな問題の一つが、ハーンの任命と承認をめぐる問題であったのである。

宗主＝付庸関係において重要な、宗主による付庸国支配者の任命問題は、実は黒海西部に位置するオスマン帝国の二つの付庸国、ワラキアとモルドヴァでも生じていた。この問題についてはすでにいくつかの論文で論じており、詳細はそちらに譲るが[16]、1774 年の条約でロシアが両公国に関して得た様々な権利を足掛かりに、その後ロシアは両公国の諸問題に関与し、影響力を拡大してゆくことになる。その中で、ロシアが積極的に関与した問題が、ワラキア・モルドヴァ両公国の支配者たる公の任命の問題だったのである。一例だけ挙げるならば、キュチュク・カイナルジャ条約には盛り込まれなかったものの、1774 年にロシアがオスマン帝国に対して獲得した一つの重要な権利は、ロシアに近い立場の前ワラキア公グリゴレ・ギカを終身のモルドヴァ公に就けることをオスマン政府に認めさせたことであった。18 世紀初め以降、両公国の公はイスタンブルのファナリオット達の中からオスマン政府が任命し派遣する制度になっており、公の任期は原則として 3 年であったが、実際には、オスマン政府は公を自由に任免することが出来たため、事実、公は頻繁に交替した。この公の位にロシアが自らの傀儡を終身にわたって就けることに成功したことにより、ロシアはその後のバルカン進出の大きな足掛かりを得た。しかしながら 1777 年に傀儡の公がオスマン政府

---

[15] Alan W. Fisher, *op. cit.*, pp. 83-84.

[16] 黛秋津「ロシア・オスマン関係の中のワラキア・モルドヴァ公問題―18 世紀後半から 19 世紀初頭まで―」『史学雑誌』第 113 編第 3 号（2004 年）, pp. 1-33; 同「オスマン帝国における附庸国と「宗主権」の出現――ワラキアとモルドヴァを例として」岡本隆司編著『宗主権の世界史――東西アジアの近代と翻訳概念』名古屋大学出版会, 2014, pp. 22-48.

によって殺害されたことにより、ロシアのモルドヴァ進出は一旦挫折する。そのためそれ以降ロシアは、自らに近い立場の人物を可能な限り長くつけることを両公国進出の重要な政策の一つとし、オスマン政府の権限である公の任命の問題に積極的に介入してゆく。これまであまり指摘されてこなかったが、黒海の北岸と西岸で、同時にオスマン付庸国の支配者任免をめぐる問題がロシア・オスマン間で生じていたことは、1774 年以降のロシアの進出を、黒海地域という枠組みで考える必要性を示す一つの根拠と見なせるであろう。

⑤「黒海問題」としてのロシアのクリミア併合

ロシアとオスマン帝国間の黒海をめぐる攻防にとって大きなインパクトを与えたのは、1780 年のハプスブルク帝国のマリア・テレジアの死によるヨーゼフ 2 世の単独統治とそれによるハプスブルクの外交路線の転換であった。それまでロシアの南下を警戒してロシアと一定の距離を置いていたマリア・テレジアの死去後、ヨーゼフ 2 世はロシアと共に黒海通商で利益を得る政策に転じ、1781 年 5 月にロシアと防衛条約を締結した。この同盟の影響の一つとして、ブカレストにおけるロシアの総領事館開設[17]とハプスブルク帝国の通商代表部設置が挙げられる。これは、両大国の圧力の前にオスマン帝国が譲歩を余儀なくされた結果であり、これによりロシア・ハプスブルク両国は、将来のバルカン進出のための足場をワラキアとモルドヴァに確保することとなった。さらに、1782 年 11 月、ロシアとハプスブルク帝国のイスタンブル駐在代表は共同でオスマン政府に申し入れを行い、以下の 3 項目について協議することを要求した。①黒海におけるロシア・ハプスブルク商船の自由航行と新たな通商特権、②クリミア問題へのオスマン帝国の不介入、③ワラキア・モルドヴァに関する規定の遵守[18]。

ちょうどこの頃クリム・ハーン国では、イスラーム的伝統を重んじないシャーヒン・ギライに対する反乱が国内で断続的に生じていたが、1781 年頃から激しさを増し、そしてついに 1782 年夏にシャーヒン・ギライはハーンの地位を追われ、バハドゥル・ギライ（Bahadır Giray）がハーンに選出された。彼を承認しようとするオスマン帝国に対し、シャーヒン・ギライを支持するロシアは軍をクリミアに派遣し、10 月にはほぼ全土を支配下に置いた。上述の 3 か条の申し入れは、そのような状況の下で行われたものであった。フランス大使の勧めもあり、オスマン政府はロシアとハプスブルクの要求を受け入れ、それぞれと上の 3 項目について交渉を行った。1 番目の黒海の

---

[17] Akitsu Mayuzumi, “The Establishment of the Russian Consulates in the Danubian Principalities in the 1780s and the Ottoman Empire”, in *Turkey & Romania: A History of Partnership and Collaboration in the Balkans*, Türk Dünyası Belediyeler Birliği (TDBB) Publications, No:18, 2016, pp. 287-295.

[18] Ahmed Cevdet Paşa, *Târih-i Cevdet*, new version, 2nd print, vol. 2, Der Saâdet, 1309h (1891-92), pp. 353-354.

通商については、翌 83 年 6 月にロシアと、また、1784 年にハプスブルク帝国との間で最恵国待遇などを定めた協約を結んだ。3 番目のワラキアとモルドヴァ問題に関しても、1784 年 1 月 8 日に、協約がロシア・ハプスブルクとオスマン帝国間で結ばれた。この中に「…立証される違法行為が起こらない限り、公は解任されない…」という、ワラキアとモルドヴァの公任免に関する規定も盛り込まれ、これにより両公国についても、オスマン政府による付庸国支配者の任免は法的には制約されることとなった。

クリミアを占領したロシアは、83 年 4 月クリム・ハーン国の併合を宣言した。この併合宣言によりロシアとオスマン帝国との間で再び開戦の危機が訪れたものの、結局 84 年 1 月 8 日、オスマン政府はロシアのクリム・ハーン国併合を承認し、これによりクリミア、さらには黒海地域では、新たな時代が幕を開けた。

このように、クリム・ハーン国併合の問題が、黒海通商や、オスマン帝国とワラキア・モルドヴァ両公国との宗主＝付庸関係の問題と共に扱われた事実は、このロシアによるクリミア併合問題の考察は、黒海とその周辺をめぐる国際関係の中でとらえる視点が不可欠であることを示している。オスマン帝国解体をめぐるヨーロッパ諸国間の政治外交問題、すなわち「東方問題」の発生初期のロシアの進出の対象は、黒海沿岸に位置するオスマン帝国の付庸国であった。それ故ロシアはその宗主＝付庸関係を緩めることを、一方のオスマン帝国はそれを可能な限り維持することを目指し、それが両国間の外交において重要な問題であった。従って、黒海周辺地域のオスマン帝国と付庸国間における宗主＝付庸関係は、決してオスマン帝国史の枠内のみで検討されるべき問題ではなく、外交や国際関係の観点からも極めて重要な問題なのである。

３．おわりに

以上がこれまでの研究成果であるが、この成果は、オスマン帝国史研究のみならず、ロシア帝国史研究、クリミア地域（史）研究、さらに黒海地域（史）研究の文脈においても、近世から近代移行期にこの地域に生じた大きな変動を理解する上で、一定の貢献を果たすことになるのではないかと考えられる。勿論、本研究はまだ途中の段階であり、今後さらに発展・深化させる必要があることは言うまでもない。こうした実証的な研究の継続と共に、冒頭でも言及したように、本研究を通じて明らかになったことを踏まえつつ、あらためて歴史的視点から、現在生じている黒海周辺をめぐる諸問題を考えることを試みたい。

本研究は、2014 年度 JFE21 世紀財団アジア歴史研究助成による研究成果である。このような貴重な機会を与えていただいた同財団に対し、心より感謝の意を表したい。

参考文献

（一次史料）

・Cevdet Paşa, Ahmed, *Târih-i Cevdet*, new version, 2nd print , 12 vols., Der Saâdet, 1309h (1891-92).

・ Halim Giray, *Gülbün-ü Hanan : (Kırım hanları tarihi) : Değerlendirme-metin-tıpkıbasım,* İstanbul : İstanbul Üniversitesi Avrasya Enstitüsü, 2013.

・*Kırım Hanlarına Name-i Hümayun (2 Numaralı Name Defteri)*, İstanbul : T.C. Başbakanlık Devlet Arşivleri Genel Müdürlüğü, 2013.

・*Mu'âhedât mecmû'ası*, 5 vols., 1295-1298h(1877-90).

・Noradounghian, Gabriel effendi, *Recueil d'actes internationaux de l'Empire Ottoman*, 4 vols, Paris, 1897-1900.

・*Osmanlı belgelerinde Kırım Hanlığı = Crimean Khanate in Ottoman documents*, İstanbul : T.C. Başbakanlık Devlet Arşivleri Genel Müdürlüğü, 2013.

・Peyssonnel, Claude Charles de, *Traité sur le commerce de la Mer Noire*, 2 Tomes, Paris, 1787.

・Vâsıf efendi, Ahmed, *Mehâsin'ül-Âsâr ve Hakâik'ül-Ahbâr*, 2 vols., İstanbul, 1219h.(1804-05).

・*Архив государственного совета*, 2 т., СПб, 1869-88.

・Дубровин, Н. Ф., *Присоединение Крыма к России : Рескрипты, письма, реляции и донесения*, 4 т., СПб., 1885-1889.

・Уляницкий, В., *Дарданелли, Босфор и Черное Море в XVIII веке*, Москва, 1883.

（二次史料）

・Дружинина, Е. И., *Кючук-кайнарджийский мир 1774 года (его подготовка и заключение)*, Москва, 1955

・Смирнов, В.Д., *Крымское ханство под верховенством Отоманской Порты до начала XVIII века*, СПб. 1887.

・――――― *Крымское ханство под верховенством Отоманской Порты в XVIII в. до присоединения его к России*, Одесса, 1889.

・Fisher, Alan, *The Russian Annexation of the Crimea 1772–1783* , Cambridge: CUP, 1970.

・İnalcık, Halil, "Yeni Vesikalara Göre Kırım Hanlığı'nın Osmanlı Tabiiliğine Girmesi ve Ahidnâme Meselesi", *Belleten*, VIII, (Ankara 1944), s. 185-229.

・ Kołodziejczyk, Dariusz, *The Crimean Khanate and Poland-Lithuania: International Diplomacy on the European Periphery (15th-18th Century). A*

Study of Peace Treaties Followed by Annotated Documents, Brill, 2011.
・Köse, Osman, *1774 Küçük Kaynarca Andlaşması (Oluşumu-Tahlili-Tatbiki)*, Ankara, 2006.
・Królikowska, Natalia, "Sovereignty and Subordination in Crimean-Ottoman Relations (Sixteenth-Eighteenth Centuries)", in Gábor Kármán and Lovra Kunčević eds., *The European Tributary States of the Ottoman Empire in the Sixteenth and Seventeenth Centuries*, Brill, 2013, pp. 47-58.
・Mayuzumi, Akitsu, "The Establishment of the Russian Consulates in the Danubian Principalities in the 1780s and the Ottoman Empire", in *Turkey & Romania: A History of Partnership and Collaboration in the Balkans*, Türk Dünyası Belediyeler Birliği (TDBB) Publications, No:18, 2016, pp. 287-295.
・黛秋津「ロシア・オスマン関係の中のワラキア・モルドヴァ公問題―18 世紀後半から 19 世紀初頭まで―」『史学雑誌』第 113 編第 3 号（2004 年）, pp. 1-33.
・――――「オスマン帝国における附庸国と「宗主権」の出現――ワラキアとモルドヴァを例として」岡本隆司編著『宗主権の世界史――東西アジアの近代と翻訳概念』名古屋大学出版会, 2014, pp. 22-48.
・――――「黒海国際関係の歴史的展開 ― 20 世紀初頭まで」六鹿茂夫編著『黒海地域の国際関係』名古屋大学出版会, 2017, pp. 26-55.